

金剛山・イカリソウロードを歩く

4月26日(月)早朝、バイクで御所市の高天めざして出発。高天彦(たかまひこ)神社駐車場に8:10着。ここの標高が450mとされているので、金剛山麓と言うより中腹にある集落と神社である。ここから山頂(1125m)の寺社までの道が「郵便道」と呼ばれている。

最短距離だが、急傾斜の郵便道

確かに山頂までの最短距離だろうが、傾斜は急で、昔、この道で郵便物を運んだ配達員さんの苦勞がしのばれる。

トイレを済ませて8:30登山開始。たくさんの蕾を付けたオオデマリの木に守られる形で水車がゆったりと回っている。川沿いの道を高天滝目指して歩き、滝の手前で川を渡り、登山道に取りつく。



切れ目なく続くイカリソウの花

クサイチゴ、ヤマブキ、チゴユリ、キランソウなどの花を楽しみながら、ゆっくり登ってゆくと、路傍にイカリソウが現れ始め、やがて切れ目なく続くこの花の中を歩くようになる。手作りの「イカリソウロード」のプレートがぶら下げてあり、花の多さとその美しさに感嘆しながら、登っていく。

ダイトレと合流、山頂へ

↑金剛山のイカリソウ 10:30 ダイヤモンドトレールと合流。すぐに一の鳥居に着き、10:47 山頂とされている葛木神社着。ミソサザイの囀りが、高く、強く響いていて心地よければかりだ。その美声を聴きながら、境内端のベンチで弁当を開く。あの小さなミソサザイが、こんなに大きな鳴き声を出せるのだ、と感心していると、頭上を二羽のカケスが無声で横切った。いつもは喧しいカケスもミソサザイに遠慮したのか、と可笑しくなる。

湧出岳から下山

食事後大阪側の遊歩道をロープウェイ(現在休止中)駅目指して歩く。ヤマエンゴサク、ヒトリシズカ、ミヤマシキミなど咲いているが、花が少なく、途中で藪漕ぎをしてダイトレに出、三角点のある湧出岳に登り、12:15そこから下山開始。途中で郵便道に合流して13:45高天彦神社駐車場に帰着。



↑キランソウ

ソハヤキ要素とは

以前にも書いたが、金剛・葛城山系のイカリソウはかつて「ソハヤキイカリソウ」という名が付けられていた。熊襲のソ、速水水道(九州・四国間海峡の旧名)のハヤ、紀伊のキ、の諸文字を連ねた用語で、九州中南部・四国南部・紀伊半島・東海地方に共通して自生する独自の植物群を「ソハヤキ要素」として分類したもので、金剛・葛城山系のイカリソウもその一つとされてきた。

←ミヤマシキミ

ちなみに、ソハヤキ要素植物の中には、コウヤマキ、トサミズキ、モチツツジ、テイショウソウ、シライトソウ、アサマリンドウなども挙げられている。



分類学の発展。キバナイカリソウに和名変更

DNA 分析の発展はあらゆる科学、なかでも生物分類学や進化学に大きな発展をもたらした。色、形など外見上の情報に左右されないこの手法により、従来の分類が大きく変えられつつある。基礎学力の無い私には戸惑うことが多い。

分類学の発展の中で、金剛・葛城山系のイカリソウはキバナイカリソウに含まれる事になったとのこと。キバナイカリソウの分布は北海道から北陸の日本海側だから、隔離分布という形になる。

ヒトリシズン⇒



蛇をいじめないで

(へびの話1)



↑ヤマカガシ(二上山で)

一昨年だったか、まだ肌寒い三月上旬、二上山の誰も通らない廃道で花を探しながら歩いていた時、一匹のヤマカガシが道の真ん中で日向ぼっこしているのに出逢った。左写真。

「さすがは“啓蟄(けいちつ)”だ」と先人の自然観察眼に感心しながら、動こうとしないへびをカメラにおさめた。

ヤマカガシは有毒だがおとなしい

長い間、ヤマカガシは無毒とされてきたが、近年、実はマムシやハブよりも強い毒をもっていること、しかも、2種類の毒をもち、首のあたりに

毒腺もあることなどが明らかにされてきた。要注意だ。ただ人間を攻撃することは、まず無いので、出遭っても触らない事、いじめないことだ。

「へびが怖い」は世界人類共通

へびを見ると悲鳴をあげる人は多い。私の周囲にも慌てて逃げ出したり、前進できなくなる人も居る。一方、石を投げつけて虐待する人も残念ながら見かける。この「へび恐怖症」は実は世界人類、いやもっと広い範囲の動物たちの“共通の遺伝子”によるものらしい。

国内外での様々な実験

この問題はNHK・BSプレミアムの「ヒューマニエンス」や他の科学番組でも何回か取り上げられた。へびを一度も見たことがない3~4歳の幼児に、花や鳥など複数の写真に混ぜてへびの写真を見せるとへびだけを素早く見つけること、大学生たちに、ノイズ(粒子)を混ぜて見えにくくしたへび、猫、鳥、魚などの写真を見せると、へびを見分ける能力が圧倒的に高いこと、などの実験が内外で行われ、「へび恐怖症」は遺伝によるものとの認識は、関係する学者たちの共通のものとなっているようだ。 ↓シロヤマブキ(御所市高天で)

学者のコメント

こうした「実験」に参加し、テレビ番組にも出席した川合信幸名古屋大学教授は次のようにコメント(要旨)している。

「人間の祖先は6500万年前から樹上生活を始めた。当時、樹上のサルを捕食できたのはワシなどの猛禽類、ネコ科の動物、そしてへびだったが、30m超の枝の生い茂った場所まで近づけるのはへびだけ。サルは、カモフラージュされたへびを素早く見つけるために、脳内でへびに反応する領域を発達させ、恐怖を感じて対応できるよう進化してきたと考えられる」

